

○江上いすず* 長谷川 昇* 矢田部直美* 鈴木真由子**

(* 名古屋文理短大, **新潟大教育)

【目的】 高齢者の入院患者は脳血管障害や骨折などによる疾病が、若い世代に比較して多いのが特徴である。そのため、早期家庭復帰を目指すためのリハビリテーションを施行することは、非常に意義があると思われる。しかし、リハビリテーションによる消費エネルギーは予想以上に大きく、リハビリテーションを行う日は、エネルギー出納バランスが崩れやすい。本報告では、機能回復に及ぼす食事との関係をみるために、食物摂取状況と身体回復状況の指標（BI点）から、リハビリテーション訓練効果を探ることを目的とした。

【方法】 1. 調査期日 1996年4月から6月 2. 対象 愛知・岐阜県に入院し、リハビリを施行している60歳以上の16人(男5人、女11人)、平均年齢76.75±8.65。けがの主な内訳は骨折及び脳梗塞による片麻痺であった。3. 調査方法 ①リハビリテーションを開始した初期（1週間目）と完了期（12週間目）の2回にわたり、調査を行った。②喫食状況は、インタビュー形式で聞き取り調査を実施した。③身体回復状況は、PT（理学療法士）によるBI点の評定を基に患者の機能回復をみた。④有意差の検定は、t検定及び χ^2 検定を行った。

【結果】 1. 完了期にいつも食事を残す者（残食有りのグループ）7人(44%)、時々残す・残さない者（残食無しのグループ）9人(56%)であった。2. 残食無しのグループはBI点の上昇率が高く、平均値の差も高く（ $p < 0.01$ ）現れた。3. 残食無しグループは副食の量が多いと回答した1回目 비해、2回目は減少する傾向にあった。同様に、食事は楽しみであるという回答が増え、間食も食べる割合が増える傾向にあった。